

Network

第2節 地域コミュニティが光り始めた

生きがいを求める市民の心が、自主的活動をさらに活発化させる

自主的活動は、主婦と高齢者を中心に全世代でますます活発化

第1節では、社会の成熟化に伴う市民の活動の多様化の動向と、その具体例として7つのグループの活動を見てきた。

どのグループにも共通することは、参加者が自分の興味、関心や問題意識に基づいてグループをつくり、参加していること、つまり、その自主性、自発性である。

このような自主的活動が、横浜市において、今どのように行われているか、全市民的なデータで見してみよう。

横浜市民意識調査(昭和61年度)によると、市民の3人に1人が、何らかの自主的活動に参加している。性別および年齢別では、男性が60代以上、女性が30～50代で高い。職業別では、専業、有職を含め主婦がトップで、次いで無職となっている。余暇時間(自由時間)の多いか少ないかが、自主的活動への参加を左右しているというところであろう。

しかし、市政モニター2000人へのアンケート

ト調査のなかの「将来新しく始めたいコミュニティ活動はありますか?」の質問には、性別、年齢を問わず、4人に3人が「ある」と答えている。自主的活動への参加の意欲の高さは、すべての世代の市民にとって、共通のものといえることができる。

自由時間の増大などの社会潮流のなかで、自主的活動はますます活発化していくだろう。

市民に根づくボランティア活動

市民の自発的な意思による、という意味で、最も典型的な自主的活動の一つであるボランティア活動。

横浜市民生局の調査(昭和61年度)によると、「現在ボランティア活動をしている」という市民は全体の3%。「以前にいたことがある」という人も含めたボランティア経験者は、55年度の6%から61年度の10%へと、着実に増えている(55年は都市科学研究室調べ)。

横浜市社会福祉協議会のボランティア登録者数も、この5年間で20%の伸び。男女比は、男性22%に対して女性78%(昭和61年度の個人登

録者)。県の調べでも、市内のボランティアグループ数は増えてきている。特に、老人に対する在宅福祉活動や施設訪問活動が増えてきていること、それから従来の分類にはなかった楽器演奏、マジック、16ミリ映画の映写ボランティアなど、活動内容が多様化してきていることが、最近の傾向としてあげられる。

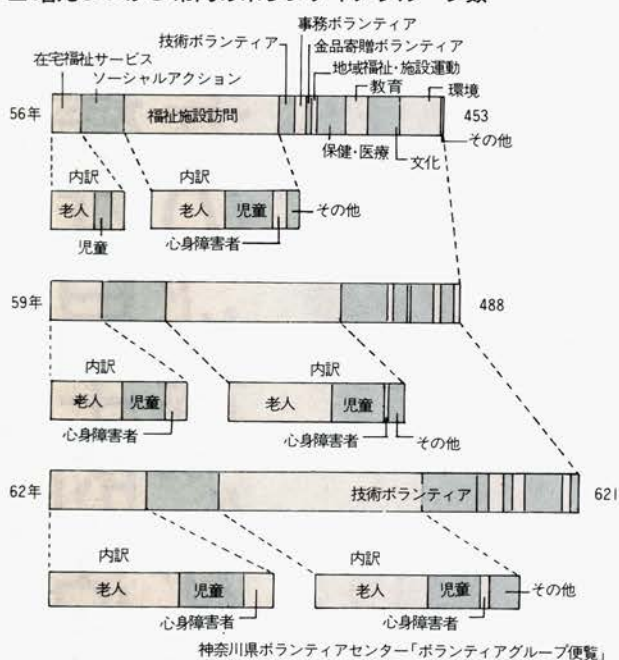
ところで、川崎ボランティアセンターが、実際にボランティア活動を行っている人を対象に行ったアンケート調査によると、ボランティアを経験する前と実際に活動した後では、ボラン



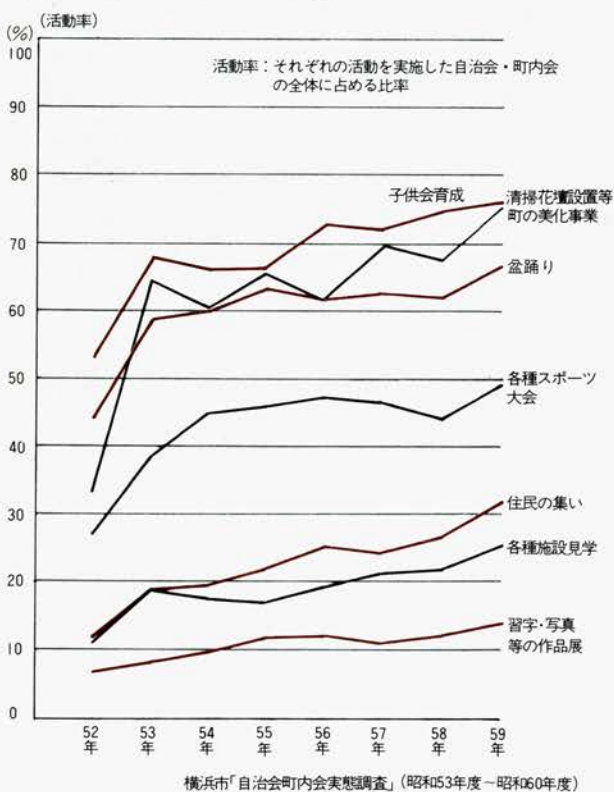
階段の上り下りでは多くの人の手がほしい

Network

■ 増えつづける市内のボランティアグループ数



■ 自治会・町内会の活動も活発化



ティア活動に対するイメージが大きく変わる、という。

「困っている人に慰めと勇気を与える活動」というイメージが激減し、「人間的なふれあいを通した内面的な喜びを得る活動」という実感をもつ人が増えているのである。

心のゆたかさを求める多くの市民にとって、ボランティアは魅力ある活動の一つ、と言える。

活動の幅を広げる自治会・町内会

地縁的組織の代表格であり、地域の活動に密

接にかかわっている、自治会・町内会。

横浜市民意識調査(60年12月)によると、市民は自治会・町内会に「地域住民の相互の助け合い」「地域住民の親睦」「地域の問題や要望の解決」などを期待している。

こうした市民の期待にこたえて、自治会・町内会でも、さまざまな新しい試みが行われ始めている。

たとえば、64ページでも紹介した、汐見台自治会連合会のホームサービスクラブの試みは、その一例と言えるだろう。

また、横浜市民局の調査からも、自治会・町内会がスポーツ大会や盆踊り、作品展などの「楽しさ」を軸にした活動にも、力を注いでいることがうかがえる。

つまり、自治会・町内会は、市民の価値観やライフスタイルの多様化の流れをふまえて、活動内容の幅を広げつつあると言える。

自治会・町内会は、多縁社会の到来のなかで模索しつつ、「市民にとって最も身近で、なくてはならない団体」として積極的に活動を続けているのである。